袁・恋姫＋無双　奪われた御遣い

流狼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
袁・恋姫＋無双　奪われた御遣い

【Ｎコード】
Ｎ８９２２Ｕ

【作者名】
流狼人

【あらすじ】
復讐が復讐を呼ぶ。止められぬ負の螺旋。それを煽るは天の御遣い。彼の者は乱世に何を呼ぶ？憎悪か？それとも・・・未来か？

序章（前書き）

天を名乗り天に殺されかけた青年による漢王朝への復讐劇。青年はどのような未来を描き辿るのかは、天すらも解らない。

序章

・・・どうして・・・

「殺せ！天を名乗る愚か者を殺せ！」

・・・なんで・・・

「ここにいるやつ等は洗脳されているに違いない！殺せ！老若男女関係なく殺せ！！」

・・・こうなった・・・

「はん、怨むなら・・・『天の御遣い』を怨むんだな！！」

俺はただ、いきなり訳の解らない場所に落されて・・・そんな俺をやさしくしてくれた皆の力になりたくて『御遣い』を名乗った。
無論、虚勢だけのハッタリだったが、御陰で村を襲った賊たちを追い払う事が出来たのだ。でも・・・その賊たちは実は官軍と繋がっていて、官軍は水を得たかのように賊たちと共に村に攻撃を仕掛けてきた。
皆も奮戦したが、わずか１００の村人と３０００の官賊連合では話にもならず、半日でこの村は消え去った。

「いたぞ！『天の御遣い』北郷一刀！！」

「くそ！」

俺は逃げた。村人たちが俺を逃がしてくれた。どうしてだろうか？
この世が村人たちのように優しかったら賊だっていなくなって・・・
皆が笑っている世界が見えるのに。

「見つけたぞ！妖術師め！我が正義の刃に沈め！！」
ザン！
「が！！」
「ふん、妖術師め。貴様のような者の性でこの世が乱れるのだ。この孫堅の刃で死ぬ事を誇るがいいぞ？」
「お、おれ・・俺・・は・・」

俺は・・・もう死ぬのか？

「まだ喋るか。もういい早く死ぬg「おりゃあぁぁ！！」がぁ！！」
「な、り・・鈴々」
どうして・・・ここに・・・
「お兄ちゃん！しっかりするのだ！！」
「鈴々・・逃げろ！」
「いやだのだ！！村のみんな死んじゃって・・死ぬ前に皆、『鈴々、お前は強い。だから御使い殿のところに行くんだ。それがここにいる皆の総意なのだ。』て、言っていたのだ！だから、鈴々はお兄ちゃんを助けるのだ！」

・・・そう・・か

俺にもやるべき事できたんだ。
このクソッタレな世界を壊す事、そして・・村人たちのように毎日

が笑顔で迎えられる世界を作るんだ。

「ぐふ・・き、貴様・・は」
「死ぬお前に関係ない。とりあえず貴様の名は？」
「し、審配。字は正南・・だ。」
「そうか・・・ではその名。いや、その人生。俺がもらう。」
「がは！！！」

かくして漢王朝は衰退し、天の名を持って殺されかけた青年。北郷一刀。

彼は審配と名乗り、袁紹の元へ行く。
これより、彼の・彼による・復讐劇が幕を挙げる。

序章（後書き）

感想・批評お待ちしています。

序章～2～（前書き）

親を殺され、親の軍をも奪われ裸一貫に成った長女は復讐を果たすべく、旅だった。が、待っていたのは凌辱の日々。彼女を救うは誰なのか、天すらも分からない。

序章～2～

私は旅立った。

「姉様待ってください！」

親を殺され苛立っているのかもしれない。

「雪蓮！待つんだ！！」

軍全てを袁術のチビちゃんに奪われ苛立っているのかもしれない。

「策殿！！！」

でも、

「ごめんね。でも、行かないといけないのよ。」

そう、“勘”が言っている。

（其処に運命が有るっと。）

「その結果がこれ・・・か。」

其の洞窟には、裸にされた女性が一人居た。手は縛られ、足枷が付いていてなにより・・・もう彼女の体で綺麗な所なんて何一つ無かったのだ。

野宿しながら親が殺された所に向かう途中賊に襲われたのだ。が、中には官軍がおり次々と兵を増やされ、あっという間に捕まってしまったのだ。

其処からは地獄だった。

髭面の大男に無理やり接吻され、体を弄ばれ・・・仕舞には「まってらんね！」の一言で三人がかりで犯され、其のまま何十人に輪されたのだった。

洞窟に閉じ込められると縄で吊るされ、其のまま犯されたり・屈辱的な恰好をさせられたり・・・

「もう、何日経っているのか・・・分からないわね。」

そういってまた一眠りする。どうせ奴らが来たら、また遊ばれるだけ。

「もう、舌噛んで死のうかしら？」

犯された時から思っているのにどうしても実行できない。

（もう、どうでもいいのに・・・）

運命なんてもう信じないと決めたのに・・・

「如何して・・・期待しちゃうのかな・・・」

白馬の美男子が助けてくれるのは御伽話だけ。なのに信じてしまう。

「はぁー。・・・寝よ。」

そして、運命が訪れた。

「大丈夫か！！今助けるぞ！！」

目を開けて、最初に映ったのは・・・

返り血を浴びて、賊が持っていたカギで足枷を外し、縄を解いてくれている青年が居たのだった。

序章〜2〜（後書き）

スイマセンでした！！！
なんか、えろえろ成分が前の小説の時から書いていなかったのでチャレンジしてみた。もし、気分が害されたのだったら、言ってください。修正しますので。（出来るかな？？）

序章～3～（前書き）

仇と運命を同時に見つけた彼女は、本能のまま行動する。それは憎しみか、それとも愛か・・・天すらも解らない

序章～3～

見つけた　ミツケタ

やっと会えた　ヤットアエタ

さぁ　サァ

抱きつこう　コロシテヤロウ

今、抱きかかえている女性を横にして脈を図る・・・うむ、生きている。

鈴々と一緒にキ州に向かう途中、ある噂を耳にした。

曰く、賊たちが官軍と協力して美しい女を捕らえ、毎日犯している。

助けるか一瞬迷ったが、”官軍と一緒に”の所に憎悪を抱き鈴々と共に賊のねぐらを急襲した。

数は５０位だったので直ぐに片がついた・・・といっても俺は１０人ぐらいしかやれなかったがな。

他に賊がいないか探していると、奥の部屋に裸で縛られている赤紫の髪をした女性を見つけた。

なるほど・・・と息を漏らすほど美しく、辱められて尚抵抗の意思が感じられた・・・が。

（といっても・・・昂らない俺って・・・男として終わっているかな？）と、感じているほど普通だった。

まぁ、とにかく賊の一人が持っていた鍵で足枷を外し、縄を解いていると彼女の方から目が覚めてきた。

「！！」

と、驚くと後ずさりして小刻みに震えだしたのだった。

（あ、っくそ！！・・・そうだな、今の彼女には・・・男は全員恐怖の対象だな・・）と、思い鈴々を呼びに行ってこの場から立ち去った。

あれ・・・震えてる？？

なんで？？

目の前にいたのは私の

運命の人なのに　カタキナノニ

俺は直ぐに鈴々を探しに部屋から出ると、すぐ傍に鈴々が入る事に気が付き鈴々を呼び彼女の容態を見てもらった。

「大丈夫そうなのだ～」

と気軽に言った時は流石に転びそうになったが、なんとか踏ん張った。

その後出ようと思ったが、周りは真っ暗で村まで結構かかったので、ここで野宿する事にし「ねぇ。」む？

そう考えていると女性のほうが起き上がってきた。

「もう少し寝ておけば？」と、言うも「ヤダ。」の一点張りだった。

（ま、魘されるよりもいいか・・・）

と、楽観視していた。

「ねぇ、貴方達が孫文台を・・・母様を殺したの？」

これを聞くまでは・・・

賭けに出た。このままでは裏の自分が面に出てきてしまう。今でもコロシタイ・・・でも、確かめたい。

あの陵辱の日々を耐えてでも待ち望んだ運命の人かどうかを。

「・・・逆に問う。君の母親が、賊と手を組み。俺たちの村を焼いたのか？」

それを聞いたとたん、違うとはいえなかった。母様は良い母様だったが、外部の人間には非常に冷たく、特に人から外れた妖術師を憎んでいた。理由は解らないが以前、占師に「死期が近い」と言われ占師の三族皆殺しにしてしまった。まぁ、結果母様は死んでしまったが、賊と手を組むような人じゃないことはわかりきっていた。が答えられなかった・・・ドウシテダロウ。

「まぁ、結局は同じ・・・恨みを持った同士ってことかな？」

「・・・なら、殺さないの。私、今弱っているからいつでも殺せるわよ？」

と挑発してみた。

隣の女の子は持っている槍で私を殺そうとしているのが解る。殺気が凄まじく、洞窟が少しゆれているのがわかるほど・・・でも青年がそれを抑えさせこう言い放った。

「殺さないよ・・・だって、君もそうだろう？この出会いは偶然、でも同時に必然でもあるんだから。俺が君を殺しても村人は帰って来る訳が無い。君が俺を殺しても母親が戻って来る訳が無い。ならばどうやって復讐するのかって？？簡単だ。この世の中に・・・漢王朝に復讐する！！・・・君も見たくないか？漢王朝が滅びる様を。」

この麻薬のような言葉で、まさに脳内が薬漬けにされた気分になっ

た。どうせ漢は滅びる。賊が跋扈し、官軍もそれに乗じている今の漢は長く続かない。でも、滅ぼそうとまで思った事は無い。復讐のためでも思った事など無かった。

アは。

あははは。

あはははははははははは！！！！！！

サイッコウにいい気分だわ。

いいわ、乗るわ！

・・・デモね・・・

「でもね・・・あなたを殺すのは私だけよ？」

これだけは譲れないわ。『天の御遣い・北郷一刀』いや、『審配・正南』！！

むぅ～～。

最近、あの褐色オッパイがしつこいのだ！

・・・お兄ちゃんに。

お兄ちゃんは鈴々のお兄ちゃんなのだ。

誰にも渡すつもりなど無いのだ。

それにしても・・・男はそんなに大きい方が良いのかな??

鈴々もいつか大きくなると思うのだが・・・

早く大きくなってお兄ちゃんの物になるのだ!!

負けないぞ!褐色オッパイ!!

いや・・・”雪蓮!!”

序章～3～（後書き）

暫く更新できないかも・・・ただ、感想は随時受付中。どしどし来てね。一言でもいいから来てください（土下座）！！

序章～4～（前書き）

傷ついた将は一人、闇に堕ち絶望する。もう、愛する主君に・・・・
愛しき妹に・・・会う事すら拒み、放浪す。そして、出会う憎悪に
何を見出すのかは、天すらも解らない

序章～4～

私は逃げた・・・戦場から
私は去った・・・故郷から
私は拒んだ・・・主君の元から
私は振り返らなかった・・・愛するものから

「・・・逃げて逃げて、一月か。」

私はお尋ね者・・・と、言うより探し人となっている。『この者見つけ次第、陳留・曹孟徳の処へ。賞金千金。』という、札が現れて以来私はキ州の国境沿いまで逃げていた。何故かは解らない。ただ、北に行って頭を冷やそうとしたからかな??

ふと森を散策中、審配という旅人にであった。

曰く、袁紹に仕えるため仲間と共に旅していて、今は自由行動中らしい。

袁紹か・・・はっきり言って私よりも馬鹿だぞ?と言ったものの、「だからこそ、面白いんじゃないかな。つまり突拍子の無いものが現れる。つまりその事で頭をフルに使えるんだ。軍師明利だろ。ましてや、軍師は君主を使って自分の名を広める者。君主を選ぶ自体、

自分の才能に自身の無い証拠だ。」と、言い返した。

どこぞの猫耳に聞かせてやりたいな。あいつは袁紹からあの方の元へ来たものだからな。

しかし・・・面白いなコイツ。話をしていても頭は疲れないから尚更だ。・・・途中、解らない単語が出るも、そのときそのときで解りやすく教えてくれる。

コイツにだったら、教えても良いかもしれないな・・・自分の傷を・・・

途中、天啓が来たーーー!!と、どこぞの極道崩れの孤児院経営者張りの声を出した雪蓮によって、森の中をそれぞれで三人分かれて散策した。

そこで少し疲れたから小川の音がするところに出ると、そこには木刀で素振りをする眼帯を付けた女性に出会った。

はて、自分の知識では隻眼で武将は、曹操の所じゃないか?と、思いつつ取り敢えず声を掛けるのに成功した。

自分の考え道理、彼女は『夏候惇』であった。なぜここにと聞いてみた所、

曰く、戦場で不覚を取って隻眼になってしまった事。

曰く、恐る恐る主君の所に報告しようとした所、傷ついた自分は要らないと主君と軍師が密議をしている事を聞いてしまった事。

結果、逃げて放浪中との事であった。

（そうか・・・彼女も『被害者か』）

そんな傷心中の彼女の心に自分の声を通らせる。彼女もまた、復讐すべき被害者なのだから。

”なぁ、俺たちと一緒に復讐しないか？この世の中・・・漢王朝に対して”

・・・言っている意味が解らなかった。

”君もわかっているだろう？賊のせいで主君と離れなければならない事を。賊さえいなければ君は皆と幸せに暮らせたのかも知れないんだぞ”

・・・しかし、賊在っての武人だぞ？矛盾しているではないか。

”別に戦うだけが武人ではない。武を教えるのも武人だし、強くなるのも武人だ。何より、戦うとは守る事、守りこそ武人としての頂点じゃないのか？”

・・・

”俺は来てほしい・・・無論、今から曹操の下へ行くのも構わない。

俺としては、傷ついた女性をほっとけ無かっただけだしな”

・・・華琳様。自分の不忠をお許しください。自分にも守るものを見出す事が出来ました。

「春蘭だ。春蘭と呼べ・・・・え～と。『一刀。審正南、真名を一刀。』うむ、よろしくな！」

一刀！！

彼らは合流し、ギョウへと入る。そこから先は、生き地獄。決して振り返れない道を彼らは、決して振り返ることなく、威風堂々と前進する。

漢王朝は衰退の窮みに入り、賊たちが蜂起する。

天はただ見つめ・・・何も答えない。答えなど無い。”盛者必衰”その言葉道理、世の中は変わり果てる。

復讐者たちの闇はどこまで続くか・・・決して解らない。

序章～4～（後書き）

アンケート！！

第一部が終わり（短！！）この小説の大部分を視聴者の皆様に決めてもらう??かも知れない質問をします。答えは、感想と共に感想版へよろしくっす。

?原作キャラの死?必要か?

?袁紹軍に、オリキャラ?必要??候補としては、田の翁（モデル：ガクエンチョ）、美しい人（モデル：弟魂戦乙女）、美しい人の金魚の糞（弟魂の弟で旗乱立は朝飯前な姉魂）。

?もう一人の天の御遣い出す?それとも・・・ナメテンノ??死ぬの?て、言うか殺していい??

?どうでもいいけど、馬嵯禍無双完結まだか。それ優先させろ！！

です。どしどし答えてください

幕間：天（前書き）

憎悪が伏して機会を待つ時、一筋の流星が・・・『もう一人の天の御遣い』が現る。彼女は何を持って望んだか？そして家族を亡くした家は徐々に亀裂し、崩壊する。そこに待つ未来は天すらも分からない。

幕間：天

私の名前は、『宮川天子・みやかわてんし』。自称天の御遣いをやらせてもらっています。

いや～、吃驚しましたよ。朝起きたら訳の解らん場所にいたし、行き成り賊っぽい人たちに襲われたし・・・あ、でも撃退したよ。

其の時、劉備って名乗る人と関羽って名乗る人に出会ったんだ。

「私達の旗に成ってください！！」て、云われた時は心臓が止まりそうに成ったよ。

でも、困っている人たちはほっとけないから喜んでやらせて貰いました。

其の後、伏龍・鳳雛の仇名を持つあわはわっ子や、主君探し途中だった星・凛・風の三人達と賊の本拠地である并州・上党を落としたらなんか文官っぽい人が来て、『并州州牧』に命じられました。

これには皆が皆、驚いていました。なんでか聞いてみると、半年前も『天の御遣い』を名乗る青年が居たのだが、当時の徐州州牧を名乗っていた孫堅がそれを五胡の妖術師と決めつけ、なぜか共闘して来た賊諸共御遣いが居る村を急襲。村人１００人と賊１０００人を皆殺しにしたらしい。が、其の時孫堅は御遣いの将・張飛に討ち取られてしまったという。その後仇討にでた孫策をも討ち、逃げられぬと覚り張飛を逃がして一人黄河に身を沈めたらしいのである。張飛はどんな人なのかは今も謎であり、御遣いの後を追ったとも言われている。

・・・すごく長い話だな。御陰で御遣いは南方では崇られているみたい。孫堅・孫策さん達の人気は高く、それを討ち取った御遣いは南方では五胡以上にきらわれているらしい。私は違うのに毎日、孫家の椅子に座った孫権さんから抗議文が来る始末・・・私違うのに。

大切な事だから二回言ってみた。

まぁ、其の孫権さんも袁術軍の客将をやらされ、更に軍師・周瑜さんとも中違いを起こしているらしいから気にしない気にしない。

そう言えば、曹操さんの所でもなんか『大剣』を名乗っていた夏侯淳さんが追放されたらしい。なんでも賊と繋がっていたとかで・・・ホントの所、曹操さんの所の軍師・禰衡が孔融という人と共謀し夏侯淳さんを離反させようと我策、そしてその夏侯淳さんを欲していた？州太守・劉岱に売ろうとした所、計画がバレて禰衡・孔融は斬首。劉岱は討ち取られたのであったが、禰衡達の罠を信じてしまった夏侯淳は逃亡、行方知らずなのだという。

・・・なんか、私っていうよりも前の御遣いさんのせいで三国志の歴史が壊れちゃってる。酷い事するな～。特に孫策って、ゲームとかじゃあ結構カッコ良くて好きなキャラなのにな～。

まぁでも、そんな過去はもう仕方ない。だから・・・

私は救うよ。今を苦しんでいる人たちを。そして、自分を信じてくれる皆を！！

天は懲りずに御遣いを寄越すも成功。一大勢力を築いてしまう。この展開がもたらす奇跡、そして渦巻く乱世。憎悪と希望が交差するのも時間の問題なのであった。

希望は挫けないか？

憎悪は癒されるか？

その後の展開は天すらも掴めない。

『御遣いっ娘』宮川天子

強さ：剣道二段。ただし実戦経験無

頭の良さ：偏差値７０台。だがこっちでは活かせない

体つき：高身長で上から８７／５６／８３。因みに一刀と同い年。

キャラ立ち：作者は東方で美鈴嬢に惚れているので恐らく容姿は美鈴嬢。御陰で途中覚醒するかも・・・ま、生きていればだけど。スキルとして『人誑し（一刀も持っている）ＥＸ：仲間にした人は離反しにくい』をもっている。

初期メンバー：劉備（桃香）、関羽（愛紗）、諸葛亮（朱里）、鳳統（雛里）、趙雲（星）、郭嘉（凛）、程？（風）

・・・チートじゃね？

（もしかしたら）二人目の主人公登場。の巻きでした。

アンケートに出したオリキャラですがキャラが分からんと言う人が居たので、説明します。

幕間：天（後書き）

名：田豊

字：元皓

真名：衛門（えもん）通称：翁、タヌキ爺

元キャラ：『ネギま』近衛近衛門

名：張？

字：儁乂

真名：千冬（ちふゆ）通称：音速の剣使い

元キャラ：『IS～インフィニット・ストラトス～』織斑千冬

名：高覽

字：伯識（はくしき）

真名：一夏（いちか）通称：張将軍のお零れ

元キャラ：：『ＩＳ～ インフィニット・ストラトス～』織斑一夏

かな？出す予定のオリキャラは・・・後出すとしても直に死んだりと一見さんで終わる可能性が高いです。

次回更新は少し遅くなります。と、言うか今神奈川に単身赴任中なのに行き成り茨城に転勤で引越の準備で遅くなります。・・・と、言うわけでこの作品、及びもう一つの作品共々応援よろしくお願いします。

哀の剣～1～（前書き）

袁家に入りし憎悪の群れ。唯、そこは思っていた以上に心地よく少し心に癒しが出てくるも、もう一人の天の登場と黄布の獣がそれを砕く。ついに表へと現る憎悪の化身は何を時代に示すか、天すらも解らない。

哀の剣～1～

俺たちはすんなりと袁家に入る事が出来た。理由はよく解らないが、姫君・袁紹様が自分たちを一目見て

「採用、ですわ。我が袁家に十分貢献しなさい。オーホッホッホッホ！！」

・・・春蘭が言っていた馬鹿発言がここまでとは、本当に軍師泣かせな姫様だ。

因みに、春蘭は袁紹とは旧知であるらしく右目と口が見える程度で顔を覆い隠すような仮面をしている。曰く、カッコイイだろ？・・・だそうだ。

孫策もマネして両目と口以外を包帯で覆ったのだった。曰く、これで自分だって事はバレナイ！！・・・だ、そうだ。

いや、バレルだろ！！と、思ったが気づいた人は一人の翁のみだった。

その翁とは、田豊。

歴史上曹操も認めるほどの軍略家、そして袁家三代に仕える大黒柱でもあり姫様も翁のことを信頼しているらしい。

ただ、見た目がぬらり・・・お化けっぽく更に、好々爺かと思ったら

「フォッフォッフォ。うむ、あの尻・胸！！猪娘も成長したのぉ～。フォッフォッフォ！！」

思いっきり変態爺だった。

まぁ、その後。

「・・・彼女らをどう使っていくか楽しませてもらうぞ？御遣い殿。わしの事は『衛門』と呼ぶが良い。・・・フォッフォッフォ～」

と言ってサラリと真名を預けて去って言った。

・・・流石は大軍師。一目でばれるとは。まぁ、本人は気にしていない様だが・・・用心しておこう。

「なぁなぁなぁ。あんたが新入りの参謀さんか？」

と、書庫へ行こうとすると訓練所から出てきたと思われる青年に出会った。

見た目から、不良っぽい目つきをしていたからカツアゲかと思ったが、違ったらしい。

彼は高覧という武将で自分とは同年齢であった為、結構話し合えたのだが。

「・・・あ？新入りの参謀に、足手纏いな弟君かよ。二人して暇な事で。」

と、擦違いざまに色々と貶す言葉が入ってくるのが、鬱陶しくなり声を出そうとするも。

「お、落ち着いてくれ、な？頼む！」

と土下座しそうな勢いで止めてきたので踏み戸惑った。

曰く、自分の姉に当たる人がここで将軍をしている。

曰く、幼い頃賊に誘拐され奴隷にされそうな時に姉が助けてくれた事。そして、姉がそのせいで戦に遅れた事。

曰く、その事を咎められ、今までの武功を白紙にされた上で棒計１００叩きにあった事。

それ以降、自分は将軍に泥を塗った恥さらしと言われた事であった。

それを聞いて一言、

「アホか？そんなの仕方ないじゃないか。」と言ってのけた。

高覧は少しムッとするが構わず、

「餓鬼が賊と・・・と言うか大人に勝てると思うか？ましてや元はと言えばそんな賊を野放しにした大人の責任だろうが。第一、そんなの一々気にしていたら老けるぞ全く。それでも罪悪感があるなら、その姉を超える武功を立てればいいだろうが。」と少しＯＨＡＮＡＳＩもとい、説教じみた話をしてしまった。きっとどこかでテンプレ乙って会話がありだがな。

「・・・そうっか、そうだな。ウッシ！ありがとな！俺の事は『一夏』って読んでくれ。な、『一刀』。なんかあったら言ってくれ。俺も協力するからな。」

・・・分かった。

分かったんだが・・・そこの柱で俺を睨む黒髪のクールビューティーな女性を止めてくれ。

祟り殺されそうなんだが・・・

その後、その女性が一夏の姉に当たる張?将軍であった。一夏が教えたならと、言う事で一緒に真名を教えても在ったが、

「おい、お前。臧洪（雪蓮の偽名）と候淳（春蘭の偽名）の知り合いらしいな・・・あいつらに言っておけ、私がいる以上袁家最強の座はわたさんとな。」

と宣戦布告してきた。

・・・狂戦士がここにもいたとは・・・

全く、姫も姫なら部下も部下か。

楽しくなりそうだな。

・・・胸が高鳴る。高鳴り続ける。彼こそが、至高にして究極。

そう、彼こそが・・・私を導く太陽なのだと。

よろしい。暫く無能の仮面を被り付けよう。

彼がどんな行動を起こすか・・・

叛乱？独立？立身？

どちらでもない、あの憎悪の瞳。

あぁ、なんと苦しくも儚く・・・そして美しい。

美しいも者を、愛でて育てるのが高貴な者の宿命。

さぁ、『一刀』さん。その憎悪をどこにぶつけるか・・・楽しみにしていますわよ？

オーーーーッホッホッホッホッホ！！

哀の剣～1～（後書き）

狂いしものが集う河北の国。混沌と憎悪は混ざり合い、乱世にどう影響するかは天すらも分からない。

哀の剣～2～（前書き）

憎悪の知恵が導く策二つ。美と醜が見えない道で繋がる策。此れより憎悪の鎖は千切れ果て、乱世に負を撒き散らす。顛末は天すらも分からない

哀の剣～2～

「此れより、軍議を行う。静粛に。」と、翁の一声より緊急集会でザワついていた文官・武官達が押し黙った。

「帝より、御達しがあった。最近、黄布を頭に巻いた集団が世の中に跋扈しておるが、なんとこの集団・・・首領・張角を筆頭に民を扇動し遂に漢王朝に武力蜂起をしたそうじゃ。ついて、大将軍閣下が漢の名門である袁家を中心に各諸侯に黄布の賊討伐命令が下された。」

さっきまで静まっていたはずのザワメキが余計にひどくなった。無理も無い・・・好き勝手やっていた王朝の負を俺たちに押付けたのだからだ。

「では翁殿。此度の戦、如何するつもりで？」と、一人の将が求めてきた。名を淳于瓊と言い、以外にも袁家の懐剣という渾名を持ち将位も顔良・文醜よりも上でもある。と言っても、斗詩殿（顔良の真名）と猪々子殿（文醜の真名）は姫の御守があるので矢鱈めったに出撃が出ないらしい。

「うむ、此度の事じゃが・・・・一刀君？やっては見ないかね？？」と、突然振ってきたのだった。

「・・・なぜ私が？」驚きをうまく隠せていないだろうが、取り敢えず平常心を保ちながら聞いてみた。

「な～に。規模がデカイとはいえ賊討伐には変わりしない。それに御主の事も心配じゃ。先の事・・・例えば、上党の一件から部屋に篭りがちと聞く。偶には今を見据えてみよ、意外と解決の道が見出せると思えるぞい？」

・・・驚いた。其処まで分かっているとは。

確かに上党の一件『天の御遣い』の報告を聴いた時、最早前の世界にすら棄てられたと錯覚して部屋に閉じこもっていたんだよな。

・・・そうだな。俺は復讐すると決めたんだ。この糞ッ垂れの世の中に、それを作った漢王朝に！！

やろう・・・やってやろう！

天の御遣い??っは、今は放って置こう。待ってろよ、賊達！！貴様等に憎悪の刃でギタギタにしてやる。

空気が変わった。いや、濁ったって感じがする。一刀の空気が変わって・・・ていうか、あいつの周りに瘴気が漂っている感じがする。

此れが千冬姉さんの言っていた一刀の闇か・・・なんかまだまだ出てきそうな気がするぜ。

「では、姫君・・・華麗に蹂躙する策と泥臭くとも圧倒的名誉を手に入れる策の二つがあるのですが・・・いかがいたしますか？」

「「「「「ヒィッ！！」」」」」

と、何人か悲鳴を上げ気絶した・・・うん。俺も少し出そうに成ったが踏み止まった。さすが俺。出来る、イケル。・・・と呪詛を唱えないといけない俺って情けないな～。

爺さんも、「フォッフォッフォ・・・少し煽りすぎたの（汗）」と言って・・・て、待てや爺さん。原因はあんたかよ！！

淳于将軍は、「・・・心地良いな。戦場前の静けさとは正にこの事。審正南・・・評価を改めるべきだな。」て、ウンウン言ってるけど・・・ここの将軍の中で凶暴じゃないのって顔将軍だけなのかｎ「バシッ！！」って、イテ～～？！

「誰が凶暴だと愚弟が・・・全く、こんなにも優しいお姉さまに何たる口か。」

い、いや、千冬姉。心の中を読んで突っ込まないでｋ「バシッ！！」グガ！

「千冬姉ではない。張将軍だと公的場ではそう言えと教育しただろうが・・・もっぺん詰めるぞ？」

ひ、ヒィィィィ！！こ、此れは退いても良いよね？そうだよね！！

って言ってる間に一刀の話が終わっていた・・・やべぇ、殆どころか全然聞いてねぇ。

「コホンッ。では、此れより作戦を発表いたします。私達本軍は、淳于将軍を筆頭に顔良さんに文醜さん。及び田爺を参謀にキ州に入る賊達の殲滅。及び南下して他諸侯たちへの援軍派兵を行います。兵は１０万。そして、別働隊は張将軍を旗に臧洪・候惇・張徳（鈴々の偽名）・高覧、参謀に審配さんを付け凡そ５千の兵にて敵主力都市、青州城攻略を命じます。皆さん、袁家の力・・・思う存分に振るいなさい！！華麗に・優雅に・勇ましく！進撃なさい！！」

「「「「「はは っ！！」」」」」

・・・ってハァ！た、たった５千で１０万以上いると言われる青洲城に乗り込むのかよ！！

て、千冬姉及び審配三人衆。ウキウキと出立準備しないで！あと、一刀の瘴気を止めろ！

っえ？無理？て、言うか言い出しっぺが止めろ？！いや無理だろうが、な、な？だから取り敢えず一刀？いや、一刀様？肩を掴まないで私室に連れ込まないで？！っへ？期待するなよ？っておいいいい！何する気？まさか・・・ホントにナニを・・・っえ違う。作戦を練るから付き合え？・・・な、何だそうか。そうだと言ってく、ッア？期待したって？？

するかーーーー！！

若き将兵たち、古参の猛将、憎悪に組するもの・・・個々だった者たちが一同に終結し、賊討伐に乗り出す。憎悪の初陣、そして飛躍は今始まる。

・・・後日、上党を中心に審（攻め）×高（受け）が発表されたのは・・・一人の姉を除いて誰も知らない。（姉は観賞・保存・布教用として3冊持っている・・・と言われている）

哀の剣～2～（後書き）

のんびりと行きます。

哀の剣～3～（前書き）

哀しき剣が一つ、袁の柱となる。才能溢れる友を持つ凡才の令嬢と
憎悪の刃が会合する夜。その行く先は天すらも分からない。

哀の剣～3～

「お邪魔いたしますわ、一刀さん。」

私は直接彼に会いに行った。

審配正南。

田爺曰く、南方では知らぬ者がいないほどの大罪人。いずれ、歴史に名を残す人物。

そう聞いていますが、矢張り何度見ても変らない・・・いや、少し違う。もっと深まってしまったのだろう。出遭った時よりも濁った目付き、感情が表に出てしまうほどの短慮な顔つき・・・何より、暇を見つけては兵士以上に訓練をしていて出来たぶつぶつな掌。

あぁ、なんと醜くも儚い。

美しさが無いのに見入ってしまうその歩み・・・もっと隣に居たい。
いえ、傍に置いときたい。其れだけが私を此処に呼んだのだ。

「如何しましたか？姫君。」

「二人の時は真名でも良い、と言った心算でしたが？」

「申し訳ございません。我儘な妹分が寝ているので。」

「あら、そうでしたか。兄妹仲良くて良いですわね。」

「一方的な我儘っぷりを見せますがね？」

と、妹自慢に入った。

臧洪・候惇・張徳、通称『審臣三人衆』

この三人、癖が強く千冬さんはおろか、淳于さんすらも手に余ってしまった武将。

田爺としては、「千人将の位が相応しい程の力量を持つ」といわれているが、余りの手癖の悪さから一刀さんに丸投げしてしまった人たち・・・まぁ、そんな三人と旅をしていたと言う一刀さんが凄いと思いますが。

臧洪さんはなんとも顔に包帯を巻いており、曰く「顔に大火傷があって人に見せたくない」との事・・・まぁ、嘘でしょうけど。恐らく顔を隠さなければ成らないほどの人物でしょう。無ければ田爺が「王たる将。」と評価しませんわ。

候惇さんは・・・何をやってますの夏候惇さん?華琳さんの所から

抜けて此方に来るなんて??まぁ、裏切ったなんて偽流言に踊らされて此方に来たのでしょうけど。ただ、華琳さん一筋だった彼女を此処まで信頼させた彼もまた以上だろう。

張徳・・・一刀さんの妹さんは凄い。力量だけなら二人を越し、未だ成長し続けているなんてどんな化け物ですの。

そんな三人ですが、今では一刀さんの臣下扱い。勿体無い気がしますが、彼女たちの手綱を握っているのは一刀さんだけなので仕方ありませんわね。

「一刀さん、昼間の事ですが・・・大丈夫ですの」

軍議の話、其の時一刀さんはあろう事か青州城を落すとの事。単純

計算でも分かるほど、勝敗は決している。

「ご安心を、姫君」

と一刀さんは手を前に出した。

「策とは言えない簡単な事・・・もうすでに青州城は我等の物です。」

「一体何処を根拠を・・・」

「青州黄布党廖化・周倉・孫仲・趙弘、そして渠帥である張曼成の内、廖・周・孫・趙・・・・まぁ、渠帥以外は此方に寝返る約定を確約させました。」

・・・なんですと??

「まぁ、十万の内８万は此方に「い、一体どうやってそんな約束を?!」・・・まぁ、簡単に言いますと張曼成という将が城で略奪強奪を当たり前のように遣り始め、最近飢饉のせいで食料が無いのに毎日宴会騒ぎ。韓忠という男が勇気を振り絞って張曼成を止めようとしたものの、客将になったという太子慈というやつが韓忠を切り捨てたせいで残り４人は此方に寝返りたいとの事です。」

・・・何という自業自得。ですが・・・

「信じれるのですか?」

「恐らく・・・最近、青州からの脱走兵の殆どが黄布の兵達でしたので。」

そうですか。

「それで、城を落した後は？どうする御積りで？」

「暫く、降伏した兵の訓練、及び内政をせねばなりますまい。旨くすれば冀州と青州の二つを任せられるでしょう。」

「そうですの・・・所で別件ですが。」

「何でしょう？」

「あなた・・・天の御遣い・北郷一刀。ではありません事？」

なぜ

ナゼ

NAZE

「どうしてそう思いで？」

「・・・感ですわね・・・そして、妹さんから出た殺気が証拠ではなくて？」

・・・まずい、このままでは計画が！！

「そうだといえば・・・どうなさいます？」

もしならば・・・眠ってもらうか、永遠に・・・

「どうもいたしませんわ。」

・・・・・

・・・

・・

・

「なぜ・・・ですか？」

「なぜって、簡単では在りませんか？今のあなたは審正南。御遣い・北郷一刀は死んだといいますわ。ならば、この地で袁家参謀・審正南として生きれば宜しいですわ。オーーーーホッホッホッホ！！と、夜更けでしたわね。」

はっは。

あはははは・・・

なんとも世の中は残酷だ。

英雄は残虐非道で有能・・・凡君は優しく無能。

・・・だが、

心地いいのは凡君か・・・

いいだろう、審正南として生きてやる事が増えたな。

漢賊を滅ぼし、孫家（雪蓮は除く）をどん底に追い落とし、曹操に絶望を叩き付け、もう一人の天の御遣いの一味を根絶やしにする。

そして・・・袁紹、麗羽の夢を叶える。

なんか、最後だけ天の御遣いらしい事をするな。

でも、今は黄布賊の事に集中しよう。

何でも・・・張曼成が書物「太平要術」をもっているらしいからな。

其れさえ手に入れれば・・・復讐が楽に、より残酷に出来るんだからな！

待っていろよ。太平要術！！

哀の剣～3～（後書き）

憎悪は安らぎを得るも其れを棄て、修羅へと入る。すべては復讐の為。そして、自分を癒してくれた姫の願いを聞き入れる為。憎悪の化身は今、修羅に入り修羅を越える。

哀の剣～４～（前書き）

黄布の終焉。男達は何を夢見て戦った結末。それを不幸と笑うかは、天すらも分からない

哀の剣～４～

「ぐは！！」　ドサ

何故ばれた・・・

「は、決まっているであろう。この我輩に、隠し事なぞ無駄なのだよ。廖化君？」

くそッたれが。

「おい、しっかりしろ！孫仲！趙弘！！」

「ぐふ・・・畜生・・・もっと・・・ちか・・・ら・・・・・が・・・」

「スマネェ・・・だん・・な・・・うぅ・・」

・・・逝ったか。俺もこの傷じゃあ無理か。

「くそがーー!!やい、太子慈。てめぇ会った時の義侠心はどうしたんだ!えぇ!何黙ってやがる!!」

無駄だ・・・

「無駄だ、周倉・・・恐らく、奴が持っている『太平要術』の本が原因だろ。」

「ふふん。察しが良いな。廖化君、どうかな？君がもう一度我輩に忠義を立てるなら助けてやってよいぞ？この本に・・・引いては我輩に出来ない事等無い。富も！名誉も！！女も！！！全部、手に入るのだからな！！」

・・・ふん・・・

「無理だな・・・なぜなら私の魂の・・・心の全ては。」

「そう、そのすべては！！

義侠心と天和様への忠誠心でいっぱいだからな！！！腐った貴様に立てる心など在るだろうか・・・いや、無い！！故に、私は貴様に反逆する！！貴様は言ったな？殺していいのは、殺される覚悟がある奴だけだと・・・だから聞こう。貴様こそ、殺される覚悟が有るか否かを！！」

「ヒッッ！！・・・ええい太子慈！！何をしている！はよ殺せ！！」

「周倉！！同士諸君を頼んだぞ。・・・逝くぞ、太子慈。我が屍、簡単に超えられると思うなよ！！」

共に義侠の未来を、そして天和様と人和様について“主に拳で”議論したあの日々はもう帰ってこない・・・ならば、せめてお前を道ずれにしよう。こう見えて自分、結構臆病でな。一人は辛いのだよ・・・

周倉・・・後を頼む・・・

二人の刃が互いの体を貫いた時・・・八万、否。

城全ての兵士たちが声を上げた。

“三姉妹万歳”　“三姉妹サイコー”　“三姉妹の為なら死ねる”

張曼成は元々官軍から黄巾に入った男であった。故に三姉妹は軍事力としか見ておらず、また何かあれば身代わりにもなる都合の良い駒と思っていた・・・いたのである。

青州城には生粋の信者しかいなかった事・・・これは想定外であった。なぜなら城に篭るのなら安全であろうと、人和が考慮して戦経験者を自分達の周辺警護として全員連れて行ってしまい、熱心な非戦闘員の信者達を残して行ってしまったのであった。まぁ、本人としては戦を知っている張曼成が居るので何かあっても大丈夫であろう、と思っての事だろうがその事が張曼成の敗北を招いたのであった。

「ヒィ、ヒィ、ヒィ・・・クソクソ!!何でだ!!あんな雑魚に太子慈が討たれるとは!!」

廖化と太子慈は互いの胸を貫き、立ったまま逝ったのであった。

故に、自らの身が危険に及ぶ前に城から脱け出したのであった。

「ま、まぁこの本があれば何と言う事など・・・「そうか、探す手間が省けたぞ。」ぐべ！！」

走り続けていきなり頬を殴られた痛みを感じた。

暗闇ゆえに見難かった影が月夜に照らされ晴れていく・・・

「お、鬼？！」

鬼であった。

性格には鬼の仮面を付けた女人であった。

「く、クソ・・・あ、あれれ？本、本は何処に！！「探し物はこ～れ？」・・あ、あああああ！！」

「もう、こいつ私が何に見えるのよ。こんな絶世な美女を。」

美女・女神。それは美しい者の例え。包帯ですら綺麗に見える。

あぁ、あっている・・・

しかし、そんなに・・・

「そ、そんな血まみれた女神などと居るものか！！」

後ずさりながらほえる。

「あらら、私女神だって。あなたは鬼なのに。」

「うるさいぞ雪蓮！・・・まぁいい、目的の物も手に入れたし雑魚を片すか、な！！」

「ま、待ってくれ！取引だ！！取引しよう！！お、俺は張角たちのことを知っている！知っている事を話す！だ、だから！だからぁぁぁぁぁぁぁ！！「死ね！！」ぎゃぁぁぁぁぁぁぁあ！」

「呆気なく終わったわね。それにしても、コイツ知らないのかしら。もう、張角達の本陣は落されて三人とも死んだって言うのに。」

「まぁ良いではないか。その『大変用心』の書は手に入ったのだからな。」

「・・・ふふ、『太平要術』の書よ。う～んあんまり戦わなかったな～。不満不満。」

「そういうな、雑魚は弱いが群れれば厄介だ。早急に片付けられて良かったではないか。」

「それはそうだけど・・・後で模擬戦ね。」

「死合と言う名のか・・・しょうがない。付き合うぞ。」

かくして、青州黄巾賊十万は降伏。その後、袁紹はキ州及び青州を治めることになったのであった。

哀の剣～5～（前書き）

麗しき羽と華々しき宝石のじゃれ合いと天女と守護神のいがみ合い。この者たちに討たれる哀れな賊たち。その結末がどう変るかは、天すらも分からない

哀の剣～5～

「あ～ら？お久しぶりですね、華琳さん・・・すこし、老けました？」

「久しぶりね、おばさん・・・貴女と違って私は忙しいのよ。」

・・・どこか寒い風が吹き荒れる陣中。

此処は、黄布賊討伐連合の本陣の中。麗羽こと袁紹とその馴染みで陳留の太守曹操が当たり前のように罵詈雑言を言い放っていた。本来は賊をどう討つか会議し合う場なのだが・・・。また各諸侯の中、天の御遣いと称される『宮川天子』・江東の守護者『孫権』等が居た・・・その二人も険悪な雰囲気であった事は間違いない。

「ふん、良くその面が出せたな。卑怯者！」

「あの、何度も言ってますが前の御遣いさんとは何の関係も無いと、再三に渡ってお返事したのですが？」

「だまれ！何度言おうが天の御遣いが、母様と姉様を殺したのは事実ではないか！」

「それだって、貴女の軍が賊と組んで村を滅ぼしたのが原因では無いですか・・・さっきから黙っていれば逆恨みばっかり・・・本気で怒りますよ？」

「ッハ！出来るならやってみろ！」

「「ガタッ！！」」

「お、落ち着け！宮川。こんな所で私闘なんて見っとも無いぞ。」

「蓮華様、落ち着いてください。」

と、宮川の盟友公孫賛と孫権近衛長甘寧が間に入って私闘を止めている状態で本人たちはガチでガン飛ばし真っ最中であった。

「は～・・・いいわ、兎に角麗羽。この状態、どうすんのよ。」

「そうですわね・・・取り敢えず二方で先陣斬って貰いましょうかしら？」

と麗羽が突拍子も無い事を言うが誰も彼もが二人の間に入って私闘を止めている状態であった。

とてもじゃないが麗羽がまた馬鹿を言ったと曹操は思っていたが、

麗羽の中には曹操すら知らない程の狂気に満ち溢れていた。

「一刀さんの人生をめちゃくちゃ孫一族、一刀さんの居場所を無くさせた女御遣い・・・いっその事、賊と繋がっていたと流して討伐しようかしら。」と何やら黒い事を考えていた・・・が。

「フォフォフォ・・・まぁまぁ落ち着きなさい。」

「「きゃぁぁぁ！！」」

袁紹軍の知恵袋、田豊の登場でその思考を吹き飛ばした・・・宮川と孫権の尻を触り続けているのを見なかった事にしながら。

「「フン！！」」

「げふぅ！！」

無論二人の報復を受けた翁は吹き飛びながら宙返りして、何事も無かったように麗羽の傍に立った。

「やれやれ全く、たかが尻を触ったくらいで紅葉を繰り出すとは・・・もっと麗羽様を見習いなさい！最近じゃあ蹴りが出てきて昇天しそうに気持ちがｙ「翁？そろそろ。」そ、そうじゃな！うむうむ。」

太陽のような慈悲深き笑みを翁の後ろでしながら麗羽は翁を止めた・・・翁の冷や汗は一向に納まらなかった事は各諸侯達が黙る事で無かった事になった。

「オホン。では、此れより軍議を始める。まず、連合の大将は何進大将軍閣下より承りし勅書を受け取った我らが姫君、袁紹様にする事。依存は無いか？無いなら次に賊達の処分等は・・・

・・・・じゃ。異論は無いかね？」

「「「・・・・」」」

完全な出来レース。完全に流れを袁紹軍に流し尚且つ他の諸侯達に喋る隙も与えない。矢張り、袁紹の知恵袋の異名は伊達ではない事を各諸侯たちは思い知り、曹操も油断無く翁の言葉を聴いていたのだった。

「・・・では、姫君、お言葉を。」

と田豊は一歩下がり袁紹は周りを見渡し宣言する。

「では、これより黄布の賊軍。通称黄巾党の殲滅を宣言します！各諸侯のみなさん、存分に力を振るいなさい！！我が袁家の名の下に、この戦い。必ず勝利致しますわよ！！」

「「「「オウ！！！」」」」

画して曹操軍の火刑が必中し、先陣を切った宮川軍・孫権軍の猛攻で黄巾党本陣が落ちたのだった。

此れにより黄巾党の賊は逃げ出し、張角は焼身自殺を図ったものの途中で引張り出され首を刈られ、張宝は逃げる者達に紛れるも同じ黄巾の者に通報されてしまい捕らえられて其の場で斬首になった。張梁は見付らず、尚且つ決戦前に病死したという噂が流れていたので病死と判断された。

此れにより漢に刃向かった黄巾党は滅亡をしたのであった。

尚、諸侯の一兵士が、桃色髪の女性を袁紹が助けたのを目撃したが、連れ出された村娘と思い上司に報告しなかった。

此れが後に大乱を呼び込むとは誰も気付かなかった。

哀の剣～5～（後書き）

仕事・・・きついっす

哀の剣～6～（前書き）

天の和に袁家の、憎悪の刃が迫る。されどそれを庇うは一人の勇者。
この結末を知りえる事ができた者は天すらも分からない

哀の剣～6～

「姫君！私は反対です！即刻、斬首にすべきです。」

憎悪が吠え

「私も反対だ。・・・それになぜか嫌な予感が、っは！！ま、まさかコイツが・・・み、認めん！一夏の嫁だと！！絶対認めん！！」

弟魂が喚き

「お、落ち着け姉さん！あと、誰が嫁だ！そういうのはもっと真剣に寄り添ってから・・・」

「悩む所が違います！！兎に角、反対派を！特に一刀さんと千冬さんを止めないと。」

「いや、無理だろ斗詩・・・瘴気出した参謀に刀振り回している鬼。どう止めんだよ？」

「張将軍は私が止めよう・・・参謀を一夏、食い止めろ。」

「無理だ！！崇られる！！ええい、三人はどうした・・・っえ、あの光景を肴に酒宴中？止めろやーーーー！！！」

「フォフォフォ・・・此処は隙をみてちふゆんの尻を撫でなけれb

「姉さんにエロい事すんじゃねーーー！！」ブフォ！」

「ハハハハハハ！もう、ドウにでも成れ？！？ちくしょーーー！」

「い、一夏君落ち着いて！！文ちゃん止めてよ！って一緒になって酒飲んでじゃ駄目だよ！淳子さんも！！」

「だってよー斗詩、収集つかないじゃん。ここは全部忘れて酒飲もうぜ。」

「そうだな、此処は酒を飲もう。何、現実逃避しているわけではない。少し、酒の国に行くだけだ。無問題。」

「大有りだよ！！うぇぇぇん！！せめて、一刀さんだけでも正気に戻ってーー！！」

穏将が混沌をみて現実を放棄する。

「・・・はははは、此処って賑やかだね。周倉君。地和ちゃんにも人和ちゃんにも見せたかったなぁ。」

「そうっすね、天和様。・・・あ、あの波才殿、もう二人は・・・」

「・・・すまん、救えなかった・・・」

「・・・そっすか。」

捕虜はその混沌をみて懐かしんでいた。

「・・・何ですの？此れは？」

「あ、何でもありません。唯、皆嵌めを外しすぎたので少しコズいただけです。」

「・・・す、少しですの？」

「はい！少しです！」

「そうですか、はぁ～。（皆さん、少し頭冷やされましたか。）」

「「「「「（はい。思いっきり。）」」」」」

其処にいたのは、全員頭に瘤を作りハンマーを担ぐ顔良に正座している主要武将たちだった。

・・・特に、一刀と一夏、千冬は三重の塔を建てて気絶していた。

張角の処分は麗羽が着たので振り出しに戻り会議進む。

「こほん、では一刀さんから。」

先ずは斬首派、審配

「っは。彼者の罪は三つ。一つ、王朝への反逆。二つ、民衆の洗脳。三つ、罪無きものへの暴行・殺害。これ等の罪から斬首が適応化かと「ま、待った！！」・・・何ですかな、高覧」

割り込むは否定派、高覧

「た、確かに許されない罪だ。しかし、張角・張宝・張梁の三人は死んだのは事実。ましてや内、張角・張宝の首は上がっていてここで張梁の首だって言ったとしても、袁家が墓を掘り返して恩賞を求めたなんて言われた日には割腹者だぞ！！」

「・・・ならどうする。確かに墓荒らしの汚名は汚すぎる。ましてや、張角の首は同じ袁家・袁術配下の者によって挙げられているのだぞ。此れでは、近い内にそれが原因で戦になりかねん。」

「そ、それは・・・そうだ。庇護しよう。彼女の歌が乱の原因なら、逆手にとって兵士の癒しにしよう。うまくすれば、兵士の士気は天を突ける勢いになるぞ。」

「そして、それがわれらの咽喉元に刺しかねないぞ。」

「なら、俺が言い出しっぺだ。責任もって俺の女中という立場になってもらい、其処から歌を歌ってもらう。」

「しかしだ「お待ちなさい、一刀さん。」・・・姫君、彼女を庇うのですか？」

「庇う？そうかも知れませんが、しかし一刀さん。貴方は乱世によって出た被害者を守る為にここにいる。ならば彼女も被害者では？元々芸人なのにこの乱で首謀者の汚名を着せられてしまった者ではなくて？」

その言葉に、一刀はビクッと成った。確かに俺は、被害者を出させない為に巨大勢力である袁紹の下に来たのだから。

「・・・分かりました。しかし、釘を刺して置く必要があります。」

「あら、何ですの？」

「簡単です。・・・一夏。」

「あ、ああ。なんだ一刀？」

「張角と交じり合え。」

ビキ！！

その音は、城中に響き

「きぃぃぃぃぃぃぃさぁぁぁぁぁぁぁまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

一匹の獣が咆哮した。

その鎮圧に丸二日要したので後に、張？の乱闘と呼ばれた。

主に

審配『全身打撲』

高覧『鼻骨骨折』

田豊『頭部陥没、三日後には直った』

と男に被害が出ただけになった事が幸いであった。尚、参謀の両者がいなくなった為責任を取って一人の弟魂が書類仕事に悪戦苦闘していたという。

その後。

「えへへ。いっくん。早く行こう！」

「ま、待ってくれ天和。」

二人の仲睦ましい夫婦と

「イクゾ、波才！周倉！」

「「はい、姉御！！」」

三人の嫉妬団が生まれたのだった。

哀の剣～6～（後書き）

感想待っています。

哀の剣～7～（前書き）

来る戦いの序章。此れより、真に乱世における憎悪の戦いが幕を開ける。此れに着いていけるものは天すらも分からない

哀の剣～7～

「きぃぃぃぃぃ！！！！一刀さん！居ますか！！」

姫君・麗羽様が、首都洛陽から帰ってきた途端切れ始めていた。何かあったのだろうか？

「どうかしましたか？姫君。」

「こ・れ・が・落ち着いていられますか！！何なのですかあの小娘！たかが逃げた皇太子を救っただけで相国？！名門たる私を無視してそんな高位に着くなんてじょーだんじゃありませんわ！！」

「姫よ、落ち着きなさい。嘆いていても現実は変らない。」

と、怒り狂う姫に手を差し伸べたのは淳于将軍でした。

「何を呑気に！第一に樹。貴女が苦労して育てた禁軍第一部隊『大樹』の将位をあの天の御遣い～なんて訳の分からない女に奪われたではありませんか！！」

「・・・しかし。それであのヘイ州が手に入りました。幽州を除く河北はすべて姫君の物。其処をご理解していただきたい。」

「樹・・・っく！！・・・すいません、少し頭を冷やしてまいりますわ。」

「御意。」

奥へ行く姫に拱手して見送る淳于将軍、樹さんの傍へ寄った。

「・・・その話、誠で？」

俄かに信じられなかった。樹さんは袁家の将・・・と言うよりも朝廷からの派遣社員見たいな人でした。袁家が収めるキ州は土地が広

く、米の出荷が他の州よりも期待できる為少しでも朝廷に多く入るようにする為に賄賂として樹さんを送ったのだ。実際袁家は、武に秀でた者や知に秀でた者が多く居たが、統率・云わば将たる人が圧倒的に居なかったのだ。故に、樹さんの参入は袁家にとってはうれしく、当時袁家の当主であった姫君の父上は彼女を「袁家における天命の将が来た。彼女こそ袁家の章邯である。」と褒めちぎったとのこと。章邯とは秦に仕えた将でもあり始皇帝死後に起きた陳勝・呉広の乱や秦に対する反乱軍を率いた項梁らを打ち破った将でもある。

そんな樹さんを棄て、天の御遣いをそんな場所に着かしたとの事。

理由は・・・何進・十常時が死んで助けてくれた董卓が御遣い女を推薦して皇太子、いや皇帝劉協が賛成した為だと事。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく！！！

はははははははははっはっはっはっはっはっは！！！！！！！！！

とうとう堕ちたか、漢王朝！

馬鹿な奴らだ。しかし、御陰で樹殿はこちら側に来てくれた。其処だけは感謝しておこう。

後は、事前に生かしておいたあの男に書状を作らせるか。くっくくくくく。董卓ぅ～、御遣い女ぁ～。覚悟しておけよぉ～。

「・・・ふ～寒いな。まぁ、これでこの男がどう動くか楽しみだな。なぁ、衛門。」

「フォフォフォ。そうじゃのぉ～。（さわさわ：尻を触る音）」

「やれやれ、爺は趣味じゃ無いんだがね。」

「む、そうなのか？」

「当たり前だ、喰うならば若く生きが良いのが良いのだがな。まぁ、仕方が無い。爺で我慢してやろう。」

「フォフォ、そうかい。では行こうかの！（ウキウキ：心が躍る音）

「うむ、そうだな。（シャーシャー：刃を説く音）」

」

・・・その後、訓練所にある厠（かわや）から、ズタボコにされた老人が出てきたとか。

その一週間後、『都で暴政を行う暴君董卓、その董卓と共に都を地獄絵図にしている天の御遣い宮川。彼の者達、討つべし。』

此れが全諸侯に送られた。

またそれに伴い、審配及び審臣三人衆・高覧・天和は先にヘイ州へ入る。

天和の歌を聞いた者たちは続々と袁紹軍入りし、逆らう親御遣い派の者たちを三人衆で一気に蹴散らしたのだった。

此れにより後顧の憂いを無くした袁紹軍は出撃した。

後の、反董卓連合戦。

其の合計、凡そ３０万。

対する董卓軍は５万

乱世招来戦である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8922u/

袁・恋姫＋無双　奪われた御遣い

2011年10月10日09時10分発行